『沈む (03/02)』

西陽が浮かぶ白雲を
紫色に染め
空を真っ赤に塗って
地平線へ太陽が
沈もうとしている

大地という舞台に
春が上ろうとしている
温もりを持った夕焼けが
耐えた生きものの苦へ
もう直ぐを 伝えている

森を虹色に変化させ
海を黄金に変化させ
街のビル街を
きらきらと光らせて
太陽が沈もうとしている

『消えた物 (03/04)』

昔 まだ川が主だったころ
荷は小舟によって運ばれて
川岸からは馬車によっていた
江戸から明治大正と続き
川は人々に明日への
思いを秘めていました

人々は江戸へ向かうことを
下りと言っていた
江戸から地元に向かうことを
上ると言っていました

江戸は東京となり
鉄道が敷かれ道が良くなり
荷は汽車に代わり
車へと変わって来ました

東京へ向かうことを
上がりと 発令され
地元に向かうことを
下りと 行政語へと発令され

電車が通り車が走り
一日で荷が届くようになったのです
海の幸が山の幸が
江戸の日々の暮らしが
不夜城のネオンと
映像の街に様変わりしました

『樹齢 (03/08)』

樹木が立っている
雨の日も
風の吹く日も
雪の降る日も
嵐の日も
樹木が立っている

人間の歴史よりも
太古の時から
大地に立っていた
吹く風の中を
降る雪の中を
雨の日も嵐の日も

人間の歴史よりも
太古の時から
大地に立っている

樹木が立っている
雨に打たれて
風に吹かれて
雪を積もらせて
稲光の中を
樹木が立っている

『旅人 (03/08)』

旅人の終わりは
死でした
旅人の終の栖は
死でした

人はみんな
旅人なのですね
人はみんな
旅人なのですね

町々を通りすぎる
畑野の道を行き
夜空の星に見られて
村々を通りすぎる

旅人は道化なのですね
人に夢を与え
旅人は道化なのです
人の悲しみを受け取って

詩とはなんでしょう
人の心でしょうか
詩とはなんでしょう
人のお墓でしょうか

『帰郷 (03/08)』

私の帰る所は
大地なのだ
生きた所でもなく
死んだ所でもなく
人が帰る所は

大地なのだ

私が生きた証は
詩なのだ
生きた所でもなく
死んだ所でもなく
人が生きた証は
沢山の詩なのだ

生命は なぜ生きるのか
生命は なぜ死ぬのか
人はなぜ涙を流すのか
人はなぜ悲しむのか
人はなぜ孤独なのか

私の生きた証拠は
詩なのです
生きたことでもなく
死んだことでもなく
人の叫びを描いた
詩という絵画なのです

私の帰る所は
大地なのだ
生きた所でもなく
死んだ所でもなく
生命が帰る所は
大地なのだ

『**終着** (03/08)』

人の生まれる前から
風は吹き
雪は積もり
雨は降っていた

花は決まって咲き
実は決まって成り
鳥は飛び交い蝶は舞い
人の生まれる前から

この大地
山が有り森が有り
川が流れ野が有り
海が対を成している

この大地
足の有る物は歩き
根のある物は立ち
羽の有る物は飛ぶ

この大地
空には雲が浮かび
白雲が黒雲が
茜雲が色を染めて

人の生まれる前から
この大地は有り
この大地によって
人は産まれた

大地によって
人は産まれ生き
死によって
人は大地に帰る

『**春風** (03/12)』

怒ったように
荒れ狂った風が
大地の上を吹いていきます
ゴーと音を発して
小枝を弓なりに曲げて
砂を宙に舞い上げて
春の前触れは怒って
やって来るのですね

陽の暖かさの中で
梅の花が咲いていますよ
しなる小枝の大樹にも
薄竹色が透いて見えます

青空を音を発して走る
狂った風が
吹きに吹いて大地は
冬の寂しさを拭き払われて
春の穏やかさを受け入れる
用意をしているのでしょうね
きっとそうでしょう
厳しさを追いやっているのですよ

『三月 (03/12)』

三月はおひな様の
季節です
赤い絨毯の段々に
男と女が飾られて
優しさと強さが飾られて
人は春の到来を祝います

春は人生の門出なのです
人は入学し
人は卒業し
人は就職し
人は転勤し
梅の咲くころから
桜吹雪の舞うころに
春は人生の門出なのです

三月の明るい日差しが
閉めきった雨戸を開けさせます
冬の暗い部屋が
陽を浴びてぬくんでいます
こんなにも恋しい春
夢の飛び交う愛しい春

『道 (03/12)』

朝陽に当たりながら
大地に道が現れ
暗黒の闇の世界から
何本もの道が
陽に照らされ
大地より姿を現す
人は眠りから覚め
人は大地に立ちて道を行く
太陽に照らされた道を
人は一日中歩く

多くの道が
太陽によって照らされ
多くの人が
その現れた道を歩く

陽によって救われた道を
凡ゆる物が信じて歩く

一日の歩きは
夕陽によって終わる

凡ゆる物の影が大地に刻まれる頃
人も歩きを止める

朝日に当たりながら
大地に道が現れる
暗黒の闇の世界から
何本もの道が
陽に照らされて
大地より姿を現す
人は眠りから覚め
人は大地に立ちて道を行く
太陽に照らされた道を
人は一日中歩く

『海原 (03/13)』

たぶん人生と戦った
話を沢山聞かれたでしょう
彼らは海原を航るのに
片時も羅針盤を離しませんでした
船の速さは関係ないのです

人は何時しか速さで
物を測るようになってしまった
いや 社会が速さを大事にした

速さなのでしょうか
人が力と頼むのは
速さなのでしょうか
人が生計を立てるのに

海原と戦った英雄たちは
大波をかぶっても被っても
波の頂上から波底へ落とされても
彼は羅針盤と舵をしっかりと
翻弄の自由にはさせなかった

『大地 (03/26)』

背高のっぽのビルの窓に
朝日が真っ赤に反射している
寝静まった眼下の海原を
日の出が明るく染めようとしている
一番鳥が天空の高いところを
東から西へと飛んでいき

鶏が時を告げる
闇が照らされ白昼となって
社会の歯車がゆっくりと動き出す

朝に命は顔を洗い
朝に命は歯を磨き
朝に命は身繕いをし
朝に命は戦いに挑む

報われに恋をしている女も
初に思いを寄せている乙女も
今日が始まる
家族を背負った男も
女を追いかけている男も
今日が始まる

人間がこの大地を謳歌してから
真っ紅な太陽は霞みに隠された
人間は太古の森を伐採し
緑の樹木を切り倒し
川の流れを濁流にし
海に汚物を流し込み
森も川も海も物言わないから

人間は弱者を食い尽くして

すべては
日の出とともに始まるのだ
人間が生きるため
この大地が作り替えられていく
森林は牧場へ
それが肉となって
着飾った紳士淑女の食卓に載る
牧場は二度と森にはならなかった
大地が隠した油を
人間は盗み取りし
勝手気ままに燃やし始める
熱いから冷房しろと
寒いから暖房しろと
空を意味もなく飛んで速さで
この大地を周り
伐採する原野を探し
燃やす油を探し

私にジンギス汗のような軍隊がいたら
私にチムールのような軍隊を持てたら
一気に人間を殺しまくるだろう
一人残さず殺しまくり

後は大地がなすのままにするだろう

『雨 (03/27)』

朝からしとしとと
重たい雨が降っています
瓦屋根を濡らし
アスファルトを濡らし
開花間近の木々肌を
濡らしています

沈む雨は温いです
濡らす雨は香りを持っています
命の美しさを慈しんで
しとしとと落ちています

人がどうであろうと
春は間違いなく来るのですね
人がどうであろうと
夏は来るのですね

温い雨に涙が光ります
命の香りに涙が流れます
愛するとは何でしょうか
愛するとはなんでしょうか

人がどうであろうとも
秋は来るのですね
人がどうであろうとも
冬も間違いなく来るのですね

朝からしとしとと
重たい雨が降っています
瓦屋根を濡らし
アスファルトを濡らし
開花間近の木々肌を
濡らしています

『花 (03/27)』

雨が木肌へ沈んでいます
濡れた木は佇んでいました
五百年間もじっと

大地に立っているのです

物言わず何を観ているのでしょうか
物言わず風へ何を飛ばすのでしょうか
物言わず何を沈ませているのでしょうか

命有る物の私情が念は
梅の花となってこの世に咲かせ
梅の実となってこの世に刻み

五百年も佇んでいる老木へ
南の雨が沈んでいます
運んできた命の情を
咲かせてくれるようにと降っています

End all 1997/03